

## ダニエル書 - 第五十六号

ヨハネの黙示録17章の謎を解き明かす：大淫婦と獣に関する最後の預言

Jeff Pippenger

2024-01-20

聖書の預言における諸王国の最後の描写は、『ヨハネの黙示録』第十七章に見いだされる。その章の三節で、天使が預言の「大淫婦」に対する裁きをヨハネに示すために、ヨハネは「荒野」へ連れて行かれる。この「大淫婦」は「多くの水」の上に座っており、「地の王たち」と「淫行」を行った。

七つの鉢を持っていた七人の御使いのうちの一人が来て、私に語りかけて言った。「ここへ来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きをあなたに見せよう。」地の王たちは彼女と淫行を行い、地に住む者たちは彼女の淫行のぶどう酒によって酔わされた。そこで彼は私を霊において荒野へ連れて行った。すると私は、冒流の名で満ちた、七つの頭と十の角を持つ緋色の獣の上に座る女を見た。ヨハネの黙示録 17:1-3.

ヨハネ自身の言葉によれば、「荒野」は538年から1798年の終わりの時までの教皇支配の1260年間を表している。

そして、その女は荒野へ逃れた。そこには神によって備えられた場所があり、そこで彼女は一千二百六十日の間養われた。... また、その女には大いなる鷲の二つの翼が与えられ、彼女は荒野の自分の場所へ飛んで行けるようにされた。そこで彼女は、蛇の前から離れて、一時と二時と半時の間養われる。黙示録 12:6, 14.

霊において、ヨハネは教皇支配の一千二百六十年の期間へと運ばれた。その年月は、イゼベル、アハブ、エリヤの歴史における三年半の干ばつによって予表されていた。その年月は、1798年に教皇制が致命的な傷を受けるまで続くことになっていた。というのも、それは第一の憤りの終わりに起こることが「定められて」いたからである。第一の憤りとは、異教主義と教皇主義という二つの荒廃させる勢力によって聖所と軍勢にもたらされた戦いの終わりのことであった。これらの事実はすべて、最近の記事で述べられている。

「大淫婦」とは、イザヤ書に出てくるツロの娼婦のことであり、彼女は「一人の王の日々」である象徴的な七十年のあいだ忘れられることになっていた。アメリカ合衆国の歴史は、その象徴的な七十年の歴史であり、それは聖書預言の最初の王国であるバビロンの治世における捕囚七十年によって型取られていた。その歴史の間、ツロの大淫婦は忘れられるはずであった。その歴史の終わりに、彼女は思い起こされ、再び出て行って自分の歌を歌い、こうして地の王たちと姦淫を行うことになっていた。ヨハネは、教皇権の裁きを見るために、霊において教皇支配の歴史へと運ばれた。姦淫を犯した祭司の娘に対する裁きは、火で焼かれることであった。

どの祭司の娘であっても、淫行によって自らを汚すなら、彼女は自分の父を汚す。彼女は火で焼かれなければならない。レビ記21章9節。

最後の七つの災いのうちの一つを注いだ天使の一人がヨハネに与えた大淫婦の裁きの幻は、彼女が火で焼かれるというものであった。

あなたが見た、獣の上にある十本の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。黙示録 17:16

大淫婦が座している多くの水は世界の人々のことであり、アメリカ合衆国が全世界を欺いて、同じく大淫婦でもある獣を拜ませるとき、世界の人々は彼女の権威の下に置かれることになる。ついでアメリカ合衆国は、黙示録十七章の預言に示されている十人の王のうち筆頭の王となり、この図では、アメリカ合衆国はその淫婦と姦淫を犯す最初の王を表している。ただし、その後、彼女はすべての王たちと同じ行為を行うことになる。

多くの王のうち最初の王は、テアティラの教会でイゼベルとして表されている大淫婦と結婚していたアハブによって表されている。イゼベル（大淫婦）への裁きは、アメリカ合衆国の力によって教会と国家の同盟に強いられる十人の王によって成し遂げられる。その王たちは、大淫婦を憎んでいるにもかかわらず、教皇制が世界を支配する（水の上に座る）ことを許すことに同意する。

あなたが見た十本の角は十人の王であり、彼らはまだ王権を受けていないが、獣とともにひとと時の間、王としての権威を受ける。彼らは一つ心で、自分たちの権力と力を獣にゆだねる。彼らは小羊と戦うが、小羊は彼らに打ち勝つ。小羊は主の主、王の王であり、また彼とともにいる者たちは、召され、選ばれ、忠実である。彼はわたしに言った。「あなたが見た、淫婦の座している水は、もろもろの民、群衆、国々、言語である。」また、あなたが見た獣の上に見た十本の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。神がご自分の御心を成し遂げるために、彼らの心をついにし、神の言葉が成就するまで、自分たちの王権を獣に与えることに同意させたからである。あなたが見たその女は、地の王たちの上に君臨しているあの大きいなる都である。ヨハネの黙示録 17章12-18節。

「十人の王」（国際連合）は、実は教皇制度を憎んでいるが、増え続ける災厄から世界を救えるという空しい望みから、やむなく、自らの束の間王国を教皇権に明け渡す。やがてその欺きに気づくと、レビ記の律法の成就として、彼女を火で焼き滅ぼすための器となる。

「『十人の王』は、神の終わりの日の民に加える迫害を通して『小羊と戦う』。」

なぜ諸国の民は騒ぎ立ち、人々はむなしいことを企むのか。地の王たちは身構え、支配者たちは結託して相談し、主とその油注がれた者に逆らって言う。「彼らの束縛を断ち切り、私たちからその縄を投げ捨てよう。」天に座しておられる方は笑い、主は彼らをあざける。そのとき、主は怒りをもって彼らに語り、激しい憤りで彼らをおのかせる。詩篇 2:1-5。

地の王たちによって教皇制のために遂行される迫害は、十字架においてキリストに対しても行われた。

あなたは、あなたのしもべダビデの口を通してこう言われました。「なにゆえ諸国の民は騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことをたくらむのか。地の王たちは立ち上が

り、支配者たちは主とそのキリストに逆らって一つに集まった。」まことに、あなたが油注がれた聖なる子イエスに対して、ヘロデとポンテオ・ピラトが、異邦人たちおよびイスラエルの民と共に集まり、あなたの御手と御計画があらかじめ決めておられたことを行うためでした。使徒の働き 4:25-28

「キリストの十字架刑の際に彼に敵対して立ち上がった『地の王たち』は、彼の民を迫害することによって再び小羊と戦う、黙示録17章の『十人の王』を表している。十字架において、それらの王たちはキリストを『取り囲んだ』『悪しき者の会衆』であり、終わりの時の彼の民に対しても同じことを再び行う。」

犬どもが私を取り囲み、悪しき者の集いが私を包囲している。彼らは私の手と足を刺し貫いた。私は自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは私を見て、じっと見つめている。  
彼らは私の衣服を自分たちの間で分け合い、私の上着のためにくじを引く。詩篇 22:16-18

大淫婦に裁きをもたらす十人の王たちは、彼女は祭司の娘だと自称する淫婦だから、彼女を火で焼く。これらの王はまた「犬」としても表されており、十人の王は大淫婦を火で焼くだけでなく、「その肉を食らう」。イゼベルの死は、彼女が城壁から投げ落とされて地に叩きつけられ、その後犬どもが来て彼女の肉を食らったことによってもたらされた。

エフーがイズレエルに来たとき、その知らせをイゼベルが聞き、彼女は化粧をし、頭を飾り、窓から見おろした。エフーが門に入って来たとき、彼女は言った。「主君を殺したジムリに平安があったか。」すると彼は顔を窓に向けて言った。「だれが私に味方するのか、だれだ。」すると二、三人の宦官が彼の方を見おろした。彼は言った。「その女を投げ落とせ。」そこで彼らは彼女を投げ落とした。すると、その血の一部が城壁や馬に飛び散り、彼は彼女を踏みつけた。彼は中に入ると、食べて飲み、そして言った。「さあ、今あのろわれた女を見に行き、葬ってやれ。彼女は王の娘だからだ。」彼らが彼女を葬ろうとして行ってみると、頭蓋骨と足と手のひら以外は何も見つからなかった。彼らは戻って彼に告げた。彼は言った。「これは、主がそのしもべテシュベ人エリヤによって語られた言葉である。『イズレエルの地の一画で、犬がイゼベルの肉を食べる。イゼベルの死体は、イズレエルの地の畑の地面の上にある糞のようになり、人々は「これがイゼベルだ」とは言えなくなる。』」列王記下 9:30-37.

十人の王、すなわち国際連合であって、その筆頭の王はアメリカ合衆国であるが、彼らは彼女を火で焼き、その肉を食い尽くすことによって、教皇制に対して裁きを下すであろう。その裁きこそが天使がヨハネに示しに来たものであり、そのために天使はヨハネを荒野の歴史へと連れて行った。しかし、それは荒野の歴史の中の単なる無作為な一点ではなく、その期間のまさに終わりであった。ヨハネが千二百六十年の終わりに置かれていたことは明らかである。なぜなら、彼がその女を見たとき、彼女はすでに迫害の血に酔い、すでに淫婦たちの母とされていたからである。

それで彼は、霊において私を荒野へ連れて行った。すると私は、緋色の獣の上に座っている一人の女を見た。その獣は冒瀆の名で満ち、七つの頭と十本の角を持っていた。女は紫と緋の衣をまとい、金と宝石と真珠で飾られ、手には金の杯を持っていたが、その中は忌むべきものと彼女の淫行の汚れで満ちていた。彼女の額には名が記されて

いた——「奥義、大いなるバビロン、淫婦たちと地にある忌むべきものの母」。また私は、その女が聖徒たちの血とイエスの殉教者たちの血に酔いしれているのを見た。私はそれを見て、非常に驚いた。ヨハネの黙示録 17:3-6.

黙示録17章に描かれている「大淫婦」でもあるツロの淫婦は、再び自分の歌をうたい、地の王たちと姦淫する時が来るまで、忘れ去られることになっていた。

1950年以前に出版された評判の良いどの辞書も、黙示録17章の緋色の衣をまとった女はローマ・カトリック教会の象徴であると述べている。しかし今日では、世界はカトリック教会をキリスト教の教会だと考えている。世界は彼女が本当は何者であるかを忘れてしまった。

ヨハネが彼女を見たとき、暗黒時代の迫害は終わりに差しかかっていた。彼女はすでに聖徒たちの血に酔っていたからである。自然の事柄は霊的なことを例証しており、人は飲む前ではなく、飲んだ後に酔う。

1798年より何世紀も前にカトリックから分離したプロテスタントたちは、1798年までにはすでにカトリックの交わりへ戻る歩みを始めていた。というのも、彼女は「淫婦たちの母」とされていたからである。ヨハネが彼女を見て驚いたとき、かつて彼女の交わりから離れた諸教会はすでに戻っていた。こうしてヨハネは1798年へと運ばれた。その時には、大淫婦はすでに何百万人ものキリスト者を殺しており、また、彼女は自分こそ教会の頭であるという思い上がった主張を、かつてのプロテスタント諸教会に受け入れさせていた。ちょうど、533年にユスティニアヌスが彼女をそのように認定したとおりである。

1798年という預言的な視点から、天使は次に、聖書の預言に登場する諸王国の最後の描写をヨハネに示した。

御使いは私に言った。「なぜ驚いたのか。七つの頭と十本の角を持ち、女を乗せている獣と、その女の奥義をあなたに告げよう。あなたが見た獣は、かつてはいたが今はいない。しかし無底の淵から上って来て、滅びに至る。地に住む者たちは驚嘆する。すなわち、世界の初めからいのちの書に名が記されていない者たちである。彼らは、かつてあり今はいないが、やがて現れるその獣を見て驚くのだ。ここに知恵のある心がある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。また七人の王がいる。五人は倒れ、一人は今おり、もう一人はまだ来ていない。だが彼が来るとき、短い間だけとどまることになる。かつてあり今はいないその獣は、第八の者であり、七人に属しており、滅びに至る。あなたが見た十本の角は十人の王であり、彼らはまだ王国を受けていないが、獣と共にひとときだけ王としての権威を受ける。」ヨハネの黙示録 17:7-12.

ダニエル書7章と8章を見れば容易に分かるように、聖書の預言において獣は王国を表す。御使いがヨハネに示している奥義は、獣と、その獣に乗る女の奥義である。獣に乗る女は、地の王たちと姦淫を行う大淫婦である。彼女はイゼベルであり、その夫はアハブである。

それゆえに、人は父と母を離れ、妻に結びつき、二人は一体となる。創世記 2:24

男は男、女は女だが、共にあるとき彼らは一つの肉となる。獣の奥義とは、それが政教一致、すなわち女（教会）と獣（王たち）の結合であり、二つの部分から成る一つの王国

であるということだ。国政と教会運営が結びつき、その関係を女が主導している状態こそが「獣の像」である。ヨハネは、女が獣に運ばれているさまを示される。なぜなら、その関係を主導しているのは彼女だからである。

そして、あなたが見た女は、地の王たちの上に君臨している大いなる都である。ヨハネの黙示録 17:18.

獣と女は共に一つの王国（一体）を表しているが、天使は大淫婦と地の王たちの関係を強調している。「かつてあり、今はない」獣、すなわち「底知れぬ淵から上って来て、滅びに至り」、そのあとを「地に住む者たちが驚嘆して従う」その獣とは、大淫婦の致命的な傷が癒やされたときの教皇権のことである。彼女は聖書の預言における第五の王国で「あった」が、1798年に致命的な傷を受けることが「定められていた」。

ヨハネが霊において1798年へと運ばれたとき、彼女は獣では「なかった」。「それでも」、まもなく制定される日曜法で締めくくられる七十の象徴的な年の終わりに、その致命的な傷が癒えると、彼女は再び生きて「いる」。自分の歌を歌い、姦淫を行い、キリスト者を殺している。

第十七章は、聖書預言の諸王国についての最後の提示であり、そのため、それは聖書預言の諸王国の最初の言及と一致していなければならない。これらの諸王国の最初の言及はダニエル書2章に見いだされ、この2章は、ハバククの「幻を書き記し、板の上に明確にせよ」という命令の成就であった二つの図表の双方に示されている。

ミラー派は、ダニエル書の2章、7章、8章に示されている聖書預言の諸王国についての理解において正しかったが、その理解は不完全であった。ダニエル書2章に関するミラーの「宝石」は、終わりの日には十倍の輝きを放つ。というのも、それは聖書預言の諸王国についての最初の言及を指し示していると認められるだけでなく、「八番目は七つに属する」という啓示についての最初の言及も指し示していると認められるからである。イエスはいつも、初めをもって終わりを例証なさる。

すべての預言者は終わりの日について語っており、ヨハネは黙示録17章で、『かつてあり、今はなく、やがて底なしの穴から上って来て、滅びに至る』獣を示すことによって、最後の地上の王国を指し示している。その獣は「底なしの穴」から上ってくるが、これは「サタンの力の新たな顕現」の象徴である。

「彼らはその証しを終えるとき [終えつつあるとき] .」二人の証人が荒布をまとして預言する期間は1798年に終わった。彼らが隠れた働きの終わりに近づいたとき、「無底坑から上ってくる獣」と表される勢力によって、彼らに対して戦いが仕掛けられるはずであった。ヨーロッパの多くの国々では、教会と国家を支配する権力は、何世紀にもわたり、教皇制を通してサタンに支配されてきた。しかし、ここにはサタンの権力の新たな現れが示されている。大争闘、268.

一部の神学者は、黙示録11章で「底知れぬ穴から上って来る獣」が、その箇所ではフランス革命の無神論として同定されているため、「底知れぬ穴」という表現は無神論の象徴だと主張するだろう。しかし、黙示録9章では「底知れぬ穴」から上って来たのはイスラム教であり、イスラム教は無神論ではない。底知れぬ穴はサタンの顕現を表している

「私は彼に、主が幻のうちに私に示されたところでは、催眠術は悪魔、すなわち底なしの淵から出たものであり、まもなくそれをうい続ける者たちとともにそこへ行くだろうと告げた。」 Review and Herald, 1851年7月21日.

「悪魔」からのものは、「底知れぬ淵」からのものである。黙示録17章では、底知れぬ淵から上ってくる獣は滅びに至る権勢であり、その書に名の記されていない者たちはそれに驚嘆してつき従う。「滅び」は永遠の断罪を意味し、黙示録では「火の池」として表されており、獣はそこに投げ込まれる。

そして、獣は捕らえられ、彼と共に、彼の前で奇跡を行い、その奇跡によって獣の刻印を受けた者たちやその像を拝む者たちを惑わした偽預言者も捕らえられた。この両者は、生きたまま硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。ヨハネの黙示録 19:20.

第十三章では、シスター・ホワイトが教皇制であると直接指摘している海から来る最初の獣が示されている。その箇所では、世界はその教皇制の獣に驚嘆して従う。

そして私は、その獣の頭の一つがまるで致命傷を負わされたかのように見えた。しかし、その致命傷は癒やされた。すると全世界の人々はその獣に驚嘆して従った。黙示録 13:13.

黙示録17章で「地に住む者たちが驚嘆してその後に従う」とされるあの獣は、まもなく制定される日曜法の際に教皇制の致命的な傷が癒やされるときに現れる、サタンの力の最後の顕現である。17章における女と彼女が乗る獣のすべての預言的特徴は、1950年以前に刊行された辞書がそう示していたのと同様に、ローマ教会を指し示している。

黙示録17章の獣は、教会と国家の結合の象徴であり、それが獣の像である。七つの頭と十本の角を持つ獣は、十人の王（国際連合）から成る王国であり、その上に女が乗り、支配している。その女はローマ教皇制であり、「淫婦たちの母」である「大いなるバビロン」として同定されている。これらの象徴が特定された後で、私たちは1798年に戻ることができる。そこは、聖書の予言における諸王国の最後の表象を受け取るために、ヨハネが連れて行かれた歴史上の時点である。

それらの王国と、ダニエル書第2章におけるそれらの描写については、次の記事で取り上げます。

歴史の舞台に登場したすべての国は、『見張る者と聖なる者』の目的を果たすかどうかが見極められるように、地上で自らの地位を占めることを許されてきた。預言は、世界の大帝-バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャ、ローマ-の興亡をたどってきた。これらの国々においても、また力の弱い国々においても、歴史は繰り返された。どの国にも試練の期間があり、いずれも失敗し、栄光は色あせ、力は失われ、その座は他の国に取って代わられた。

「諸国民が神の原則を退け、その拒否によって自らの破滅を招いたにもかかわらず、なお、彼らのあらゆる営みを通して、神の主権的な御旨が働いていることは明らかであった。」『教育』177頁.